

## 三階

大村伸一

世界の縁が三階にあると聞いたので、三階に行くことにした。これが、世界の縁ではなく世界の中心があるのだといわれたら、行こうとは思わなかっただろう。他でもない私の父は、そのようにして出発し二度と戻っては来なかった。祖父もまたそのようにして行方が知れなくなったのだと父は知っていたのにも関わらず、同じ運命に陥るとはいかにも愚かなことではないだろうか。

準備を簡単に済ませ自分の部屋を出発してから、さて三階がどこにあるのかと考えた。三階が二階の上であり四階の下にあることくらいは私でも知っている。そして#階と階を移動するには、階段、エスカレーター、エレベーターなどがこの順番でよく利用されることも知っている。滑り台、縄梯子、ロープ、それに鉄柱などを使う場合もあるがそれは緊急の場合に限られていると誰かに聞かされた記憶もある。だから、私は最初階段を探したのだ。だが、半日ほど歩き回ったあげく、階段などどこにもないということが分かった。勿論、エスカレーターやエレベーターなどもありはしない。

住居と住居を行き来する通路の天井や壁には暗がりのできないような間隔で電灯が設置されていて、その電灯を十余り数えると、決まって壁に大きな文字で数字が描かれていた。それは場所を示す番地なのだと子供の頃から思っていたが、案外、その数字はここが何階なのかを示していたのかもしれない。そう思うようになったのは、半日歩き続けて見てきたその数字がどれも同じ文字だと気づいたからだ。同じ文字であるということが町の外から来た私に分かるはずはないのだが、これほどいろいろな町を一日の間にめぐり歩いたから、それに気づいたということなのだろう。それにしても、どの町でも同じ文字が使われているとは奇妙な話だ。おそらく、余所者の誰かが町町をめぐって、壁にあのような文字を書き付けたということかもしれない。その文字はその人物にとって大切な意味があるはずであり、どの町にいても変わらずに重要なことといえば、この階を示す数字と考えるしかないだろう。それより重要な言葉など他にあるはずがないからだ。半日の間、階段を探し続けて、私にはそれがよくわかった。

それでもその数字が、おそらく数字であろう文字が、どの数を意味しているのかは、残念なことに分からない。もしも誰にでも分かるような文字であれば、今頃、この階の壁には数字など一つも残ってなどいないはずで、そうなればやはりここが何階なのかは分からなっただろう。いずれにせよ、ここが何階なのか分からないのは同じことだ。勿論、たまたまここが三階であるという可能性もないではないが、そんな僥倖を期待するのは愚かなことだ。数が言い直せば階が無限に存在することは知っているし、無限にあるその中の一つの数が言い直せば階がたまたま三である可能性がゼロなのは確かなことだ。ゼロとはこのような場合のために用意された数字なのだから。

「階段を知りませんか」

店に入るとすぐに店員は私に背を向けて後の棚の商品を数え始めた。何か話したくない理由があるのにちがいない。何か私と話したくない理由があるのにちがいなかった。私は

会話を始めるために、共通の話題で話しかけた。

「階段を見たことはありませんか」

店員は私の言葉をしばらく無視していたが、店の奥まで届く大きな声でそう繰り返し問いかけられると、ようやく気付いたとでもいうように振り返った。

「御用でしょうか」

店員は笑顔でそう答えた。店の中には他に客はおらずもうしばらく無視していてもよかったとでもいうような作り笑いだった。そのとき、私はその顔の中心を見つめたまま、この女は雇われているだけなのだと気付いた。そうでもなければ、これほど長い時間、客を無視することはないだろう。あるいは、私を客だと思っていないのかもしれないが、その場合、客でない者に笑顔を見せるような無駄なことをするからには、やはり雇われているだけなのだろう。

「何か御用でしょうか」

店員が同じ言葉を何度も繰り返していることに気付いた。求める答えが得られるかもしれない。

「私は客です」

あわててそう答えたが、店員は少しも信じていないようだった。私は、すぐそばにあった棚から、赤と青の縞模様が描かれた小箱を手に取り、カウンターに置いた。これを買うのだから私は客だという意味だった。店員にもすぐにその意味は伝わったようだった。

「申し訳ありません。それは売り物ではないのです」

よく見ると、カウンターの上に置いたのはいわゆる店員がよく使用する類の名札だった。店員の胸にも同じ名札がつけられていて、そこには読めない文字でおそらく店員の名前が書かれているようだった。

「すると、売り物はどこにありますか」

店員はそのような質問を受けたことなど初めてだというように、かすかに唇を震わせた。

「売り物なら店のいたるところにあります。でも、誰もそれを見つけられないのです」

挑戦的な物言いに私はここが目的地なのではないかとすら思ったが、即座にそんな馬鹿なことなどあるはずはないと自分に言い聞かせた。

「店員であるあなたが、棚卸しさえできないというわけですね」

そんな言葉をかけられたのは初めてだったのだろう。店員の目が少し大きくなったように見えた。店員はそれ以上何も言わず、ただうなづくだけだった。おそらく、この女はそれがずいぶんと心の重荷になっていたのだろう。よい機会と思われたので、もう一度聞くことにした。

「あなたは階段を見たことがありますか」

急に店員の唇から力が抜け落ち口をかすかに開いたまま、質問の#意味を考えているかのようにぼんやりと私を見つめ始めた。もしかすると「階段」という言葉を聞いたことがなかったのかもしれない。あるいは、「階段」という言葉の意味が私とは違っていたという可能性も十分に考えられる。それでも店員が「階段」をどんなふうに理解していたのかは結局分からなかった。

「その階段が私の考えている階段ではないことを祈ります」

ひとりのありふれた店員の祈りは誰に届くというのだろうか。私は店内を見回して、す

ぐ背後にある棚から双眼鏡を手にとり、店員に見せた。

「それではこれは商品ですか」

店員は手元にある赤い色の装置で確認すると、すこし息をはずませながら、そうですと答えた。

「商品を見つけたお客様は初めてです」

とも付け加えた。店員にしては迂闊な物言いだった。それにつけこんだというわけではないのにもかかわらず、店員はその双眼鏡を半額で売ってくれた。双眼鏡を何に使うのかさえ店員は聞かなかった。紙袋の中の双眼鏡は意外にも重く、両手で抱えなくてはならなかった。店員は入り口まで出てきて私を見送ってくれた。商品が初めて売れた喜びのためというよりは、ただ追い出したかっただけだろう。店から私が出て行くことをその目で確かめたかっただけだろう。店から次の曲がり角まではずいぶん離れていたが、その角を曲がるまでずっと店員の姿が店の入り口に見えた。よほど疑っていたのに違いない。曲がり角に達すると、まだ店の前にいた店員が頭の上で大きく手を振っているのも見えた。これこそ双眼鏡を使う場面ではないだろうか。そう思いついた私は双眼鏡を紙袋から出し目にあてて#店に焦点を合わせたのだが、店員の姿を捉えることはできなかった。肉眼では手をふる店員が見えておりつまり店の中に入ったのではないのだから双眼鏡は偽物だったのかもしれない。双眼鏡は偽物だったのだから返品のため店に戻るべきだったろうか。すでに角を曲がってしまった私には店はもう見えなくなっていた。角を曲がった後であっても双眼鏡を使えば見えたのかもしれないと今では思う。だがあのときは双眼鏡は偽物だと思い込んでいたので、そんなことは思いもつかなかった。その日眠りにつくまでずっと、このような商売を告発するために、店員の名前を聞いておけばよかったと、そのことだけを考え続けた。

他の階から来たという女が大勢の前で話していた。会場の入り口では、遅れて到着したのだから椅子はもうないと言われ、中に入ると、今まで使っていた椅子を畳んでどこかに運び出していく途中だった。まだまだ集まってくるということなのだろう。小さな演壇の上に立った女のすぐ目の前まで人が詰めかけていた。それでも、女の声は甲高く入り口のあたりにいても聞こえた。こんなに多くで聞いていたのではその内容までは分からない。女の背後のスクリーンには大きなポスターが貼られていた。床から天井まで届くほど大きく、部屋の#一番離れた場所からでも見える。そこには何かが書かれていたのかもしれないが、すでに文字は一つもなく、どこかの風景写真だけが見てとれた。ずいぶんくっきりと見えていた。誰でも知っている場所なのだろう。

女の話が終わったのか、一区切りついたのか、誰かが女に質問をし始めた。前の方に立っていたその誰かの質問の声は聞こえたが、女が答え始めるとすぐに聞こえなくなった。女は背後のポスターを振り返り、写真の一部を指差し何かを説明しているようだった。指差す形が写真から消えてしまう前に、それがこの階のいろいろな場所で見かけたあの文字に違いないと気づいた。それは確かにあの数字だ。だとすればその写真は、この階のどこかにある誰でも知っている壁の写真なのに違いない。運がよければ、女はこの階が三階なのだと教えに来たのだろうし、運が悪ければ、この階は明日、取り壊しになると伝えに来たのかもしれない。この階が三階であり、明日取り壊しになると伝えに来たのであれば運

などどこにもありはしないということだ。写真があれほどはっきりと見えていたのは、取り壊しになる階が何階なのかなど誰も気にしていなかったからだろう。

それとも、気にしていたのだろうか。気にしていないなどということがあつたらうか。勿論気になるはずだ。だからこそ、あの壁の近くに住んでいる者はこの会場に呼ばれなかったのだ。それに、質問があつたということは、気にする者がいたというまぎれもない証拠ではないだろうか。気にしていなければ誰も質問などしはしない。それにしてもいったいどんな質問をしたのかと思う。もしも冷静な人物であれば、ここが何階なのかを尋ねたことだろう。この階が取り壊されるのであれば、住人は上の階か下の階へ移動しなくてはならない。どこに移るのか、ここが何階なのかはともに生死に関わる問題だ。だとすればそのどちらかを尋ねるしかないだろう。

話は終わっていなかったようだった。質問への回答が終り、壁の写真または写真の壁からもう一度こちらに向きを変えて、女はまた自分の話を続けた。私は質問をした誰かを最前列にみつけ出すと、集会が終わるまで、その男から注意をそらさないように気をつけた。男は小柄で、私と彼の間立っている者が少しでも動くときすぐその陰に隠れてしまう。それでも男は熱心に話を聞いていて女の目の前の#場所から動かなかつたから、すぐにまた見つけ出すことができた。

やがて女の話が終わると観衆からは拍手もなかつたが、女もまた拍手のないことをこれといって残念がっている様子もなかつた。それから、案内の声に導かれて、聞いていた者はみんな出口に向かつた。新しい参加者との入れ替えだということらしい。質問した男は反対側の扉から出て行つた。出口に向かう人々を追い越すのは難しい。出口にできた列は長かつたから、同じ扉から部屋を出たときには男の姿はすっかり見失つていた。

外に出てから出てきた扉をふりかえると、扉はすでに出口ではなく会場の入り口に変つていた。人の背丈よりもいくぶん高い看板が扉の両脇に立てられていた。女の背後にあつたポスターと同じどこかの壁の写真だつた。文字はすでに擦り消え、今では写真でさえそれが何なのかも分からないほどに薄く消えかけていた。これがどこの写真なのかが、女の話の中で説明されていて、聴衆はこの場所がどこなのか理解したことだろう。男を追いかけず、女の前の場所に移動してもう一度話を聞くべきだろうか。質問した男の場所に陣取りもう一度女の話の話を聞けばよかつただろうか。質問した男と同じように何か質問をして答を手に入れたほうがよかつただろうか。いずれにせよ、一旦外に出てしまつてはもう一度中に戻ることはできない。入り口の係に満員だと言われればどうしても中には入れなかつた。

人混みの中で何度か激しく蹴られたカバンの中の双眼鏡が壊れていないかどうか気がなつて取り出してみたが、多少傷はついてはいたが幸運にもレンズは割れてはなかつた。そもそも偽物の双眼鏡なら壊れていようが無事だろうがどちらでも同じことのようにも思えたが、壊れていなければまた誰かに売ることできるかもしれない。それでレンズに罅が入っていないかどうか目に近づけて確かめてみた。すると双眼鏡に遠くの人人の顔がはっきりと映つていたのには驚いた。これほどはっきりと見えるということは、双眼鏡は偽物ではなく一時的に壊れていただけなのかもしれない。さらに、双眼鏡の中心にあるつまみを回せば、どこまでも遠くに焦点を合わせられた。どこまでも続く通路の先を、あの質問をした男が歩いている姿さえ捉えることができた。この双眼鏡を売りつけたあの店員を告

発しなくてよかったと思いながら、私は男を追いかけた。

双眼鏡を覗きながら歩くと得体のしれないものが足や体にぶつかった。痛みを感じることもあったが、それは稀だった。大抵はぶつかるやとすぐに離れていく。中には名残惜しそうに体にしがみつくものもいたけれどそれもしばらくすれば後へと過ぎ去ってしまう。あれは何か大型の肉食獣だったのかもしれない。味見をしようとする私の腹の周囲にからみつき舐め歯を立ててみたりしていたのだろう。だがあのおいはあるいは、道端に草を乾燥させるために丸めて置かれていた干し草だったのかもしれない。動物の糞とも枯れて腐った植物の塊とも思えた。もちろん双眼鏡ではそのように自分の近くにいるものをみる事など不可能だから、あれが何であったのかを知ることはない。

質問をした男はレンズの中で次第に駆け足になり、次第に姿が小さくなっていく。双眼鏡で捉えられていることに気づいたのだろう。そもそもこんなに小さな男を双眼鏡で捕まえられるとは思ってもみなかった。だが走り始めたからには男はすぐにもこのレンズの外へ逃げ出してしまうだろう。逃げられないように双眼鏡を逆さまに覗き込んだり左右を逆に持ったりしてはみたものの男の姿は遠ざかるばかりだ。だが双眼鏡の中央にあるつまみに指が触れ偶然回したとき、男の姿がそれ以上小さくならなくなったのは幸運だった。男の動きに合わせてつまみを回せば男が遠ざかっていくこともなくなるようだった。それどころかすぐに近くに呼び戻せるのだとすぐに分かった。つまみを右か左に回すたびに男が大きくなったり小さくなったりを繰り返し、それと同時に男が近づいたり遠ざかったりを繰り返した。おそらくそのつまみは双眼鏡の倍率を変えるつまみなのだろう。男の適切な大きさは質問したときの男の姿を思い出せば分かった。そこから類推すると、双眼鏡の倍率は、男と自分の間にある建物の数に違いない。男が大きくなり近づいてくるにつれてどんどん倍率は小さくなってゆく。男が遠ざかると倍率は大きくなっていく。逃げられないようにするには、双眼鏡のつまみを素早く回し続ければよかった。つまみを回転させれば、男はどんどん目の前に近づいてきた。私の目の前で男は腕を振りまわして駆け続ける。この距離なら、間違いなく、手を伸ばせば男の腕をつかめるはずだ。肘を触ることなど簡単なことだろう。左手の小指であれば手を伸ばすまでもなく、小指のほうから私に触れようとさえしているように見える。男の吐く息の音が聞こえた。すぐ目の前で走り続けている男の吸う息の音も聞こえた。双眼鏡は音さえ拡大するのだろう。おそらく、本当に男を目の前に連れ戻せるのは確かだ。だが、男はすぐ目の前にいながら、目の前から消えようと走り続けている。男の汗が双眼鏡のレンズに飛び散って像が滲んで見えさえもする。熱く発熱した男の体温を感じる。何か腐った木のような匂いもした。だから男は人間ではなかったのかもしれない。

それほどまでにして走らなければ、逃れられないのだと男は分かっていたのだろう。男がどこにも逃げられないように倍率を小さくし続けた。小さくし続けているつもりだったが、つまみをどれだけ回しても双眼鏡の倍率は決して1にもゼロにもならなかった。倍率を1にすれば、男と私自身を見分ける事は不可能になるだろう。昔、町で双眼鏡が禁止されたときは、そんな噂をよく耳にした。実際に倍率が1になったために他の誰かと一つになってしまった者を見たことはないが、もしもそんな姿になった人間がいたら、それを子供に見せようとはしないものだ。それから、倍率をゼロにした話などは聞いたことさえないが、ゼロになったら男か私のどちらかがこの世界から消えてしまうのだろう。試してみ

ようとは思えなかった。

「脱出口はどこですか」

そう声をかけたが、男には聞こえなかったにちがいない。いっこうに走るのをやめようとしなかった。そのまま放っておいてもいずれ走れなくなったのは間違いなかった。男の右足の靴底が破れ、男が道に足を着くたびに、粉末状になった靴皮が足元から飛散していた。そのまま走り続ければ男の足の裏が、靴底と同じ運命に陥るのは明らかだった。

「うそつきには出口はありません」

驚かせようとそうも声をかけたが、男はふり向こうともしなかった。それで耳が聞こえないのかもしれないと気づいた。講演で質問をした男であれば耳が聞こえないということがあるだろうか。人違いだったのだろうか。勿論、耳が聞こえなくても質問はできただろう。回答が得られてもそれに興味がないのならば、どんな質問でもすることはできる。質問の中身を男に確かめなくてはならないはずだ。その他にも男に確かめたいことはたくさんあった。その確かめたいことをひとつひとつは覚えていないが、たくさんあったことだけは覚えていた。私は男を捕まえるために双眼鏡から左手をはずし、男の肘に手を伸ばした。男の肘は目の前にあったし、捕まえることは簡単だと思えた。だがそれが間違いだったのだろう。右手だけでは双眼鏡の倍率はすぐに不安定になり、男の姿はたちまち形を失い、目の前から姿を消してしまった。あれほどはっきりと合っていた焦点も狂い、もう二度と男は双眼鏡の中に戻っては来なかった。

双眼鏡をあちこちに向けてしばらく男を探し続けたが、男はみつからなかった。男に逃げられてしまったのだと諦め、双眼鏡を目からはずした。男の気配を感じればすぐに使えるように、双眼鏡はカバンにしまわず、紐を通して首から下げることにした。すでに時間は遅く、あたりに人影はなかった。誰もいない通路だったのなら、目の前にあの男が走っていたというのも気のせいだったのかもしれない。だとすると、この双眼鏡の性能は思ったよりも高かったということになる。あの店員を告発しようなどと何故考えたのか今ではさっぱり分からない。とはいえ、片手で操作できるような双眼鏡を早急に手にいれる必要があると思った。あの店にならあるかもしれないが、あの店はずいぶん遠くになってしまった。

双眼鏡を覗きながらずいぶん歩いたようにも思ったが、まだあの会場の前にいた。会場の入り口はすでにしっかり錠がかけられ、すべてが終わった後だった。壁に立てかけられていたどこかの壁の写真の看板も持ち去られていた。看板がなくなって分かったのだが、その看板の後に隠されていた壁にはまぎれもないあの数字が描かれていた。だとすれば、看板だと思っていたけれど、実はその壁を見ていただけなのかもしれない。

こうして落ち着いて見直すと、それが数字だということのはっきりと分かった。数字という文字は独特なものだから、今まで確信を持てなかったのが不思議なくらいだ。さらにじっと見ていると、もう少しでその数が三なのかどうかが分かるような気がした。三でなければすぐにでも他の階に行かなくてはならないだろう。三ならば、この階にある世界の端を探そう。

何故今まで思いつかなかったのか不思議でならないが、私は手に持った双眼鏡で、その数字を覗いてみることにした。その壁に男が隠れていれば、双眼鏡で見つけられるはずだからだ。壁に男が隠れていないことなどあるだろうか。それに、双眼鏡を通してなら、ど

ここに隠れていてもすぐに見つけ出せそうな気がした。そう考えて双眼鏡で壁を見ると、壁には男ではなく数字が映っていた。そして双眼鏡に映る数字は、少なくとも三ではないようだった。

他の階から来たという女は案外窓の外の縄梯子を伝って来たのかもしれない。確かに、これまであちこちの町を歩いてきて、窓を見たことは一度もなかった。窓の絵さえ見たことがない。おそらく、あの壁の数字を隠す看板と同じように、窓を隠すように看板が立てかけられているのは間違いのないところだ。通路や壁に配置された街灯は、窓がないことに誰も気づかない程度には明るく、それでいて窓があったとしても目につかない程度には暗くなっている。つまり、あったとしてもなかったとしても区別できないほどの明かりが選ばれているということなのだろう。街灯は、具合が悪くなると灰色の制服を着た保守係がやってきて修理すると誰かに聞いたことがある。私自身は一度も保守係を見かけたことはない。目立たない色の制服を着た者は目立たない。点滅していた街灯が突然はつきりと輝き始めるとき、姿は見えなくても保守係が残した潤滑油のにおいを感じることもある。定められたにおいまで支給されているということなのだろう。

窓が保守係の担当なのかどうかは分からない。とはいえ、街灯の保守係でなく、ただ保守係というからには窓も修理しているのに間違いないだろう。窓を開けて窓枠に腰をかけて、破損した窓を外側から交換することもあるだろう。そんなとき、彼らは自分の尻の下はらかな地表を目にして、何故自分は保守係になったのだろうと後悔するのだろうか。それとも、その危険こそが保守係になった者だけに与えられる特権だと感じるのだろうか。私は保守係に会うためにも窓を探さなければならない。

私の探していたのは階段だったろうかそれとも窓の外に垂れている縄梯子だったろうか。そう考え始めると、探していたものはどちらでもない何かまったく別のものだったのかもしれないとさえ思える。そのとおり、決して見つからずその手がかりさえないものを探し続けていると、自分の探しているものが何だったのかわからなくなるものだ。それだけでなく、探しているものを生まれて以来一度も見たことがなければ、わからなくなる以前からわからなかったのだということにさえなる。私の場合、階段がまさにそのようなものだった。

確かに、あの女がこの階の取り壊しを告げに来た以上、私はこの階を離れ、上の階か下の階に行かなくてはならない。ここが一階であり、ここに地下がなければ下の階などないのだし、ここが最上階であり、屋上を階と呼ばないのであれば上の階も存在しない。だとすれば、上に行かない階段や、下に降りない階段に迷いこまないように気をつけるべきだろう。私の父や祖父はそのようにして道を誤ったのかもしれないと、私は今ではそう思っている。

かねてから、私は、階と階を移動するには、階段、エスカレーター、エレベーターなどがこの順番でよく利用されることを知っていた。それだけでなく、滑り台、縄梯子、ロープ、それに鉄柱などを使う場合もあるがそれは緊急の場合に限られていると誰かに聞かされた記憶もある。そして、この階が取り壊しになる今こそがその緊急の場合であり、縄梯子を使うべき時だろう。このように緊急の場合には、滑り台ではどこか見知らぬ階に滑り

落ちてしまいそうだし、ロープでは容易に千切れて助かりそうにない。鉄柱は確かに頑丈そうだが、この階に鉄柱があれば目につかないはずがないではないか。見えはしないがあるとするればそれは階段やエレベータなどではなく縄梯子でしかありえないだろう。だとすれば、探すべきものは縄梯子であり、探すべきものはその縄梯子の掛けられた窓だ。

だとしても、縄梯子であれ窓であれこうして探し続けているのにもかかわらずこれまで一度も見た記憶がないというのはどういうことだろうか。見たことがないという記憶は確かにあるのだから、縄梯子も窓もどこかに存在するのは間違いのないところだ。だとすれば、誰かが縄梯子を隠しているということになる。誰かが窓を隠しているのにちがいない。

「隠しているのですね」

、桃色の作業服を着た若い女が壁に塗料を塗っていたので、通路の反対側の壁によりかかりしばらくその仕事を眺めていたあとで、そう尋ねた。若い女は問われたことどころか見られていたことにも気づいていなかったとでもいうように、それから壁を塗り続けほとんど天井に達するまで白く塗り続けた。声をかけるたびに脚立が金属のこすれる音を立てて揺れたので、聞こえていることははっきりしていた。

「何を隠しているのかということさえ隠しているというわけだな」

天井近くで仕事をしている女に聞こえるように大きな声で言わなくてはならなかった。天井での一仕事を終えた女は、それを聞いて逃げられないと悟ったのだろう、ゆっくりと降りてきた。下からは女の尻と腰にぶら下げた空の塗料缶の底だけが見えた。思ったよりもちいさな尻だった。思ったよりも大きな缶だった。最後の数段を跳び降りたのは、そういう規則だったのにちがいない。見事に着地を決め、一步私に近づくと紙切れを差し出した。それにはこう書いてあった。

「隠されていることは何一つ隠されていない。隠されていないことはすべて隠されている」

私のした質問はよく尋ねられるので、あらかじめ回答を用意していたのかもしれない。だが、書かれていたのは私には見た事もない文字だったのでどれだけ考えてもその意味が分からなかった。紙にはいつまでも文字が残ったままで、女はそれに気づくと何も言わずすこし後ずさりをした。だとすれば、この女が何か言ったとしてもその意味は分からなかっただろう。空になった塗料の缶を地面に置き、私の動きに注意を払い自分と私の間に脚立を挟むようにして、床に置いたままにしていた書類とペンを拾い上げると、体を翻しそのまま逃げていった。大事な脚立を置いていくとは、今日の仕事はもう終わりというわけだ。

天井まで届くほど大きく見えていたが、女がいなくなった今、それは小さな玩具の脚立だった。手のひらに乗せれば、重ねた両掌の中に隠れてしまう程だった。こんな物をいくつ重ねても天井に届くわけがない。それでも、天井のあたりまで白く塗られた壁はまだ果物のおいが残っていて、そんなにおいのする白い塗料を天井のあたりまでずっと塗っていたことは確かだ。脚立ではなく何か別のものを使っていたのだろうか。私を騙していたのだろうか。

よく見れば、脚立だとばかり思っていたものは縄梯子にちがいがなかった。人工の繊維をより合わせて作った縄には継ぎ目がなく、それでいて梯子の形に編み上げられている。何



度か丸めたり元に戻したりを繰り返してみたのだが、乱暴に扱っても結び玉ができないのは、このあたり特有の編み方というわけだ。何か冷たい宝石のようなおいがしている。どうしてこれを脚立だと思い込んでいたのかどうしてもわからない。果物のにおいだと思っていただけなのも何故なのか分からない。それでも脚立でなく縄梯子だから、手のひらの中に収まるほど小さくもなるし、伸ばせば天井までとどいたのだろう。縄梯子には降りるときは少し余分に短くなる傾向があるものだ。だから最後には飛び降りたのだろう。窓がなくても縄梯子はある。おそらくその事実を気づかれないように、縄梯子ではなく脚立だと思わせかけていたのにちがいない。

この階の終わりを告げに来た女は、この縄梯子を使ってやってきたのだろうか。私は縄梯子というものを見たのは初めてだったし、たいていの住人は縄梯子を一生見ることなどないだろう。だとすれば、この階にはこの縄梯子以外に縄梯子があるとも思えない。窓がなく縄梯子だけがあるその縄梯子を伝って、あの女はどこからここに来たのだろうか。天井を見上げて誰かが降りてこられるような穴があいているわけではない。そこから下の階に降りていくことができるような穴が床にあいていれば、一目でそうだとわかるだろう。勿論、それがわからないように地面の看板や天井の看板で隠していないとも限らない。

「天井の看板はありますか」

その店に入ると、店員に尋ねた。ぼんやりとこちらを向いた店員は痩せていて、あきらかに食事が足りないためにぼんやりとしているのだろう。穴のあいたような顔の店員は私の言葉の意味がわからないようで、何も答えず私のあたりをみつめている。決して私の顔を見てはいないが、かといって私以外の何かに視線をとどめているわけでもなかった。店ほどの店も同じ作りになっていて、商品の並べ方も同じだから、はじめて来たこの店の奥のほうの棚に看板があることは知っていた。だが、天井の看板などというものはこの店でも見たことはない。

「通路の床の看板はありますか」

そう尋ねても店員の表情は変わらなかった。ゆっくりとゆらす頭には、短く刈った髪が頭皮から垂直に突きたっている。髪の毛の先端は斜めにカットされていて、指で触れれば指に突き刺さり指先は切り裂かれるだろう。それでも、店員の動きがゆっくりしているので、髪の毛に指を刺される前にゆとりをもってその頭を避けられた。店員はそんな頭を左右にあるいは右左へと振りながらレジの向こうから小さな扉を開けてでてきた。看板の置いてある場所を案内しようとしていたのだろう。何も言わない店員の後について店の中を歩いて行くと、途中の棚に双眼鏡が置かれていた。双眼鏡の二十倍の替えレンズがあれば一組買っておきたい。双眼鏡の二十倍の替えレンズでこの店を見ればそのレンズは四百倍の替えレンズになるだろう。だが十二倍の替えレンズさえどの店にもなかった。

棚の充電器を手にとってその表面に印刷された文字を読もうとしている客が手を振って挨拶してきた。写真も文字もない雑誌のような形の紙の束に顔を埋めていた客が肩をゆすって挨拶してきた。冷たい缶を手に取り表面に浮いた水滴を指ですくって舐めていた客が顔をひくつかせて挨拶してきた。勿論、私ではなく店員に向かって合図を送ったのだ。店員は気づいていないようだったが、実は気づいていて私に悟られないように挨拶を返していたのだと思う。そうでなければ、挨拶を送ってきた客の表情が変わったはずだ。そん

な気配は少しもなかった。

店の一番奥の棚の前で止まると店員はそこを指差した。私はすでに何を探していたのかを忘れかけていたが、それを見て、探していたのは双眼鏡の十二倍の替えレンズだったと思い出した。店員は長い顔を歪めなにか恐ろしい表情になったが、あれはおそらく笑って見せたのだろう。私がレンズを選ぶのをしばらくその場で待っていてくれた。待っていたというよりも盗まれないように監視していたのはその目を見ればわかった。私は十二倍の替えレンズを三つ手に取り、これを買うと伝えた。店員の顔がさらに歪んだので、その顔の上下を逆さまにすれば別の誰かの顔になるのだろうと思った。

替えレンズは重ねれば倍率が上がり並べればより広い範囲を視野に収めることができる。店員が言葉を話せるということがそのとき分かった。代金を払うと急に店員はそんなことを話し始めた。彼もまたかつて誰かを探して様々な町を尋ねたのだという。そのときこのように高い倍率の替えレンズがあれば見つけられたかもしれないと残念そうに語った。結局見つけられなかったのだから、彼は本当は存在しない誰かを探していたのだろう。私の祖父はそうして行方不明になったのだし、私の父もまたそのようにしてまだ迷い続けているのに違いがないからだ。

天井まで壁を塗っていた女はそれから何度かみかけた。いつも私に気づいていたのだろう、決して自身から近づいてくることはなく、私が近づくと仕事が終わっていなくてもすぐに姿を消してしまう。縄梯子を忘れていくようなことは二度となかった。ある日の早くに、壁の塗装が剥げて塗り替えが必要そうな壁に噛みかけのガムを貼り付けておいたら、案の定、昼前には女が訪れ、ガムを剥がすのに夢中になっている間に逃げられない距離にまで近づけた。

「保守係に休日がありますか」

驚いていたはずだがそれを隠して、いつものように、女は聞こえないふりをしていたので、もう一度尋ねた。

「保守係に休日がありますか」

答えない女が体を動かすたびにそう問いかけていると、やがて聞こえないふりをするのを諦めたのだろう、こう答えた。

「私は保守係ではないわ」

保守係でなければ、私の言葉が伝わるはずのないことに、女は気づいていないようだった。私は笑いそうになるのを堪えながら、それはもったもな事だと言った。それで打ち解けたのだろう、壁を塗るときに注意すべき三つの原則や、郵便係の恋人がいること、それにレンズの素材はいつも上の階から運ばれてくることなどを語り始めた。そして、これまで避けていたのは規則でそう決まっているからだと言いつつ、本当はこんな話をたくさんしたかったのだと、上目遣いで語った。

「彼女は下から昇ってきたのだろうか。それとも上から降りてきたのだろうか」

話をするようになって何度目かにそう切り出してみると、それは上に決まっているわと答え、それから口をつぐみ、顔がかすかに歪んだ。そんなに重要な秘密をうっかりと漏らしてしまうとは、この女は本当に保守係ではなかったのかもしれない。それから急に身支度をはじめさようならと言いつつ脚立にしか見えない縄梯子をカバンに詰め込んで、これで仕

事は終わりと言って帰って行った。どこかに帰る場所があるかのように帰って行った。仕事が終わるというの、今日の仕事これで終わりという意味なのか、それとも彼女の仕事が終わってしまったという意味だったのか、二度と会わなかったのを確かめられはしなかった。だとすると、あれは彼女の仕事が終わったという意味だったのだ。それに気づいてから、窓の外に身をさらして窓の下を見下ろしたときの気持ちについて聞いておけばよかったと悔やんだ。

それから彼女以外の保守係にさえ二度と会わなかった。修理の必要な壁や床は、修理がまったく必要がないか、修理が必要であっても私の見ている間に修理されることはなかった。それでもしばらく後で同じ場所に戻れば、たいてい修理は終わっていて、保守係が仕事をしたということは分かった。ただ、同じ場所に戻ることはほとんどなかったのも、それもそれほど確かなことではない。あるいは保守係という仕事ですでになくなってしまったのかもしれない。知らない間に修理が進んでいるからには、保守係という仕事はなくなったといっても、仕事自体がなくなったわけではなく、その名称が保善係であるとか修裏係といった名前に変更されただけなのだろう。保守係ではないにしろ、安善係であれ集理係であれあるいは完境係という漠然とした名称や係係系という意味の分からない名前であってもいいのだが、いずれはそのような担当者に会い、どこかにある窓の場所を確かめたいと思っている。だが、どうして窓のある場所を知りたいのか、知りたかったのか、その理由までは覚えていない。最初はそんなことを知りたかったわけではないような気がするが、それもはっきりと覚えているわけではない。

探すべき場所を間違えていたのかもしれない。そうでなければとつくにそれを見つけ出して、旅を終わりにしていただろう。その場所の近くまでたどり着いていたのではないかと思わないでもないが、確かめる方法はない。もう一本向こうの通路の先にその場所があったとして、この場所でなくその場所であると知る方法がないのだから、私はすでにその場所を見つけていたのかもしれないし、一度も辿り着けていないのかもしれない、いずれにせよそれは分からない。

いや、探すべきものを知らなかったのではないだろうか。場所を探すだけだなどということがありえないことは、こうして旅を続けてみてよく分かった。場所などではなくその場所にある何かを探していたということのほうが、いかにもありそうな話ではないだろうか。だとすると、探していた場所さえ分からないというのに、探していたのかどうかも分からない何かなど、思い出せるはずもない。そもそも、その何かがあるかどうかさえ確信があったわけではないような気がする。ただ、その場所に行けば、それがそこにあるならば、それだとすぐに分かるはずだと思い、旅を始めたのではないだろうか。勿論、これが旅であったとしての話ではあるのだが。

私の祖父や父が旅に出たまま二度と戻ってこなかったのは、彼らもまた探すものを知ることなく探し続けているからなのかもしれないと、この頃では思っている。どのような理由で旅をはじめ、どのような理由で旅を終えられずにいるのかは分からない。いずれにせよ、旅というものは愚かなことであり、私もまた愚かだったと言えるだろう。愚かであることを明瞭にするためだろうか、通路が途切れたこの場所で、私は先に進むこともできず、このようにして旅の一部始終を書き続けた。それが本当に一部始終なのか、一部だけ

なのかははっきりしない。  
(おわり)